キャラクター名
聖澤　蓮（PC5）（サラマンダー追加型）

プレイヤー名

シンドローム	ハヌマーン サラマンダー	ワークス	格闘家	カヴァー	宗教家
オプショナル		年齢	27	性別	女性
覚醒	探求	衝動	解放	初期侵食率	36 %
出自	名家の生まれ	経験	出世	邂逅	家族：神城早月

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	1	1			5
感覚	1	0	0			1
精神	2	0	0			2
社会	2	0	0			2

HP	32
行動値	13
(非装備時)	13
戦闘移動	18
全力移動	36

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	7		射撃			ＲＣ			交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
日本刀	白兵	5r+6	3	5		
雲耀之太刀　一足一刀	白兵	8r+6				コスト7　電光石火+吼え猛る爪+コンセントレイト
雲耀之太刀　左肱切断	白兵	5r+6				
	白兵	5r+6				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
携帯電話	
制服（と言うか僧服）	
ウェポンケース	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
神城早月	P　慈愛	N　憐憫		
Dロイス：変異種（ハヌマーン）	P	N		
檀家	P　誠意	N 疎外感		
大虎星	P　庇護	N　憐憫		
ニブルヘイム	P 好奇心	N 不信感		
鍵守 牡丹	P　信頼	N　不安		
ミーティア	P　誠意	N　憤懣		

最大財産P:	6	残り財産P：	0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
獅子奮迅	1	4	メジャー	武器	範囲選択	白兵対決	SL回	
効果：このエフェクトを組み合わせた攻撃を範囲（選択）にする。1シナリオSL回								
電光石火	3	3	ﾒｼﾞｬｰ&ﾘｱｸｼｮﾝ					
効果：このエフェクトを組み合わせた判定のダイスを＋（SL＋1）個する。ただし、1d10点のHPを失う。								
先手必勝	3							
効果：行動値を＋（Lv×3する）。侵蝕率のレベルアップを受けず、基本侵蝕率を＋4								
クロスバースト	3	4	メジャー				80↑	
効果：このエフェクトを組み合わせて行う攻撃の攻撃力を＋（SL×4）する。その代わり、ダイスを－2個。								
コンセントレイト：ハヌマーン	2	2						
効果：組みあわせた判定のクリティカル値を－SLする。								
クロックアップ	2	4	メジャー		対決	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	SL＋1回	
効果：このエフェクトを組み合わせた攻撃のダイスを+3個、ダメージを+5. このエフェクトを組み合わせず、これ以外のエフェクトを組み合わせて判定した場合、常にダイス－1個								
炎の刃	3	2	メジャー					
効果：このエフェクトを合わせた攻撃の攻撃力を＋（SL×2）する。								
フェニックスの翼	3	4	クリンナップ	至近	自身			
効果：HPをSL×5点回復する。戦闘中でない場合、1シーン1回								
火の鳥の加護	2	4	オート				SL回	
効果：フェニックスの翼の対象を「範囲（選択）」に変更する								
軽功	1		常時					
効果：非常に身軽。ビルの壁面や水面であろうと、平地と同じように駆け回ることが出来る。								
効果：								
効果：								
効果：								

サラマンダー覚醒経緯（捏造）
修行の一環として、座禅を組み瞑想しながら、聖澤蓮は先だっての戦いの事を思い出していた。
あの日、あの時、剣を交えた二人…その二人は、決して単なる悪人には見えなかった。
一人は、己の破滅を望み、ただ燃え尽きんと自らの命を燃やしていた。
一人は、己の無力を嘆き、悲しみのままに自らの心を焦がしていた。
形は違えど、そして、非常に悲しい形であっても、あの二人は「燃え盛って」いた。
道理を弁え、己を律し、常に「冷静たれ」とする自分自身とは、真逆の「熱情」。
二人の心を憂えると同時、二人の中に、自分に足りない物を垣間見た気がした。
そして、自問する。私に、あの二人と向き合う資格はあっただろうかと。
一人には説教をし、一人はその魂を労った。
だが、自分はその器であっただろうか。心より燃え盛る事を知らぬ自分が、己を「抑えつける」事に価値を見出してきた自分が、あの二人を諭す資格があったのだろうか。
もちろん、あの二人は何よりも激しく燃えていたが故に、その炎は周囲を巻き込んだ。
だが、一方で自分自身の、自分自身への抑圧は、周囲を巻き込んではいまいか。
ただ冷徹に勤めるだけでは、真に人を理解する事は叶わない。
心に熱情を。
その一方で、冷徹を。
相反するこの二つを、聖澤蓮は「熱望」した。
あの二人を、真の意味で救えてはいない。
だが…まだ、自分にはそれを成す機会がある。
そのために、「熱情」を。二人をあそこまで走らせてしまった「熱情」を知りたい。
これが、聖澤蓮の、生涯において初めて自覚した「熱情」だった。